

炎症性腸疾患におけるリンパ腫

Lymphoma in inflammatory bowel disease: *Greenstein AJ, et al (Cancer 69: 1119-1123, 1992)*

著者らは炎症性腸疾患(以下, IBD)に発症したリンパ腫の9例[潰瘍性大腸炎5例, Crohn病(以下, CD)4例]について検討した。

一般的に, IBDに発症するリンパ腫は主として腸管自体に発生すると従来は報告されてきた。しかし, 著者らの症例では, CDの4例中全例, および潰瘍性大腸炎(以下, UC)の5例中4例までが腸外型であった。

CDは平均26歳で発症して, その24年後にリンパ腫を発症していた。なお, CDは全例男性であった。

UCでは, 既報告例の結腸リンパ腫の発症年齢が平均46歳であるのに対し, 著者らの腸外リンパ腫の発症は58歳と比較的遅く, その際UCの発症自体も46歳と比較的遅かった。

UCに発症した結腸リンパ腫の1例では過去の26の報告例と同じで全結腸型であったが, 腸外リンパ腫ではUCの範囲がより狭い傾向にあった。

以上のように, UCにおいて結腸リンパ腫が発症する危険因子は, 大腸癌の発症と同様に, 全結腸型で長期にわたり持続するUCであることだが, UCの発症自体が早いために比較的若い時期に悪性疾患を発症していた。

ただし, UCに結腸リンパ腫のみ

ならず大腸癌を発症した4例(著者らの1例を含む)では, 例外的に, UC発症後わずか10年以内に結腸癌が発症していた。

一方, 腸外リンパ腫の場合, UCの罹患範囲は比較的狭く, UCは比較的高齢で発症し, リンパ腫の発症も遅い傾向にあった。

なお, IBDに発症するリンパ腫の原因として, IBDによる一次的な免疫能の欠如, 免疫抑制療法, セリアックスブルーにおけるのと同じような慢性の炎症の関与, X線の被曝などが示唆されているが, 著者らの9例中5例ではsalazopyrinもステロイドも投与されておらず, 薬剤の役割は低いと考えられた。

(愛知県がんセンター消化器内科

高木 篤 抄)

「Gastrointestinal Pathology and Its Clinical Implications」

Klaus J. Lewin, Robert H. Riddell, Wilfred M. Weinstein 著

広島大学教授・第1病理

田 原 榮 一

今度, 医学書院から“Lewin, et al: Gastrointestinal Pathology and Its Clinical Implications”という, 1,488ページにも及ぶ膨大な本が出版された。

この本は, 2巻からなり, 極めて内容が豊富である。第1巻ではまず, 生検や手術材料の取り扱い, 固定法, 染色などを含む技術について, 次いで, 血管障害, 放射線障害, 免疫不全などを含め消化管全体

を通して共通な疾患などが総論的に, そして, 食道, 胃, 十二指腸, 虫垂の疾患について, それぞれ各論的に記述されている。第2巻では, 小腸, 大腸の疾患について書かれているが, 2巻とも, マクロ・ミクロと, X線写真あるいは内視鏡写真とがよく対応されており, しかもほとんどカラーである。

良性腫瘍と悪性腫瘍との病理組織学的診断基準が欧米と日本とで異なる

点はあるが, いずれにしろ, 病理医のみならず内科, 外科, 放射線科を含む消化管専門医にとって, 日常の診断に大いに役立つものとして推薦できる。

●Published by Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., New York, 1992, two-volume set, 1,488 pages, 2,097 full-color photos, 148 black and white photos, 22 line drawings, ¥54,800

医学書院洋書部(☎03-3817-5670~1)